

書簡理論と修辞学の視点から見た 第二コリント書1-9章と10-13章の関係*

山田 耕太

1. 1-9章と10-13章の関係に関する研究史的回顧

第二コリント書は内容的に見て、1-7章、8-9章、10-13章の三つの部分に分かれると従来から考えられてきた。しかし、18世紀後半にJ.S.Semlerが、第二コリント書はいくつかの断片的な手紙を組み合わせたものであり、とりわけ10-13章は、1-8章、9章とは別の手紙である、という説を出して以来、1-9章（その中でも、特に1-7章）と10-13章の関係が議論されてきた⁽¹⁾。1-9章と10-13章は、別の手紙であるのか、それとも同じ手紙であるのか。1-9章と10-13章が別の手紙であるとする、1-9章が先に書かれたのか、それとも10-13章が先に書かれたのか。このような問いを巡って、第二コリント書1-9章と10-13章の関係は、以下のように大きく分けて、三つの説に分かれており、今日に至るまで一致した意見は見られない。本稿では、書簡理論の視点と修辞学の視点という全く新しい視点を導入して、1-9章と10-13章の関係という古くから論じられてきた問題を改めて論じてみたい。

第二コリント書1-9章と10-13章の関係という文学的問題は、第一コリント書を書いた後のパウロの旅行計画と実際のコリント訪問との関係、パウロの同行者と同行者のコリント派遣の関係、コリントの状況という歴史的経過をいかに説明するのか、という問題とも深く係わってくる。とりわけ所謂「悲しみの訪問」「悲しみの出来事」「悲しみの手紙」⁽²⁾との関係をどう説明するか、という問題と係わってくる。これらの問題を説明する大別して三つの立場は以下の通りである。

(1) Semler-Windish説⁽³⁾

この立場は、第二コリント書1-9章と10-13章は内容も調子も異なるばかりでなく、喜びと和解に続く募金の勧めの後で、対立・葛藤が取り扱われるのは不自然であり、両者は別の手紙であるが、1-9章の後で10-13章が書かれたと考える。また、パウロとコリント教会との間には、第二コリント書では結局二度の対立・葛藤があったと考える。最初

の対立・葛藤は、「悲しみの訪問」の時に「不正を行った者」(7:12)によって生じ、この問題でパウロはコリントを去らなければならなくなった。パウロは、旅行を中断してコリントからエフェソに帰り、「悲しみの手紙」を書き送ったが、この手紙は現在は喪失したと考える。そして、パウロはテトスと再会した後に、マケドニアから第二コリント1-9章を書き送った。しかし、その直後にコリントに侵入してきた論敵によって新たな対立・葛藤が生じたので、パウロはこの状況に対して再度弁明するために10-13章の手紙を書き送ったのである。

現代の英語圏で用いられているC.K.Barrett、V.P.Furnish、R.P.Martin、M.E.Thrallらによる主要な注解書は、この立場で書かれている⁽⁴⁾。とりわけBarrettは、12:18で述べられているテトスのコリント派遣が既に8:6、16-24で言及されていることから、10-13章が先に書かれたとする10-13章と「悲しみの手紙」との同一視説に反対する⁽⁵⁾。それに対して、Furnishは1-9章では主に一人称複数で書かれ、10-13章が一人称単数で書かれている文体の違いを強調する⁽⁶⁾。

(2) Hausrath-Kennedy説⁽⁷⁾

この立場は、第二コリント書1-9章と10-13章の間には互いに矛盾する記述があり、両者は別の手紙であると考えられる。また、「悲しみの手紙」と10-13章を同一視して、対立・葛藤の後に和解に至るのが自然であるとし、10-13章の後で1-9章が書かれたと考える。従って、この立場では、第二コリント書に見られるパウロとコリント教会との対立・葛藤は一度しかなかったことになる。パウロは「悲しみの訪問」の後に、コリントを訪問する代わりに、10-13章の「悲しみの手紙」を書き送り、それが功を奏したので、和解と喜びの手紙である1-9章を書いた、と考える。

戦前の英語圏では、この説はかなり支配的であり、例えばA.PlummerやR.H.Strachenによる注解書、あるいはフランス語圏のJ.Héringによる注解書は、この立場で書かれている⁽⁸⁾。また、戦後のドイツ語圏ではこの説はかなり有力である。2:14-7:4は1-9章とは異なる手紙の断片であるが、10-13章と同じ「悲しみの手紙」である、というWeiss-Bultmann説⁽⁹⁾、さらにそれを発展させて、2:14-7:4は1-9章とも異なり、10-13章とも異なるもう一つの手紙の断片である、というBornkamm-Schmithals説⁽¹⁰⁾も、Hausrath-Kennedy説をさらに展開した説である。

(3) Zahn-Kümmel説⁽¹¹⁾

1-9章は10-13章と同じ手紙である、という伝統的な見解も、19世紀では支配的であったが、T.Zahn以来、今日でも引き続き見られる⁽¹²⁾。

例えばKümmelによれば、8:6、16-18のテトスと兄弟のコリント派遣が12:18に反映されていること、2、7章で言及されている「悲しみの手紙」の内容が10-13章では述べられていないこと、反対に2:3以下・7:8以下では10-13章の大使徒たちへの反論が何も述べられていないこと、また10-13章が後に書かれた別の手紙であるとする、1-9章の手紙を書いた後の状況の変化についてパウロが何も述べていないこと、さらに1-9章と10-13章が別の手紙であるとする、前者の末尾と後者の冒頭が欠けていることが説明できないことから、1-13章は統一した一つの手紙である、と考える⁽¹³⁾。

この立場では、パウロは「悲しみの訪問」の後で「悲しみの手紙」を書き、テトスに携えさせてコリントに派遣するが、それは喪失したと考える。そして、マケドニアでテトスに再会した後に、喜びと慰めばかりでなく、それに警告と弁明を付け加えて第二コリント書すなわち1-13章を再度コリントに書き送った、と考える。

以上の最初の二つの立場である、1-9章と10-13章は別の手紙である、という立場は、今日では多数派であるが、1-9章と10-13章のどちらが先に書かれたか、という多数派の間で見解が分かれている問題は、10-13章を「悲しみの手紙」と見なすことができるか否かが、その議論の要点である。

2. 書簡理論から見た1-9章と10-13章の関係

10-13章を「悲しみの手紙」と同一視するHausrath-Kennedy説に対して、2、7章で述べられている「悲しみの手紙」の記述と10-13章の論争的な議論の内容が一致しないとしばしば指摘されてきた。それに対して、同一視する立場から10-13章は「悲しみの手紙」の断片的な一部分であり、一致しない部分は10-13章以外の別の断片的な部分に書かれていたのであろうと考えられてきた。

しかし、最近になって、Hausrath-Kennedy説の新たな展開として、F.Watson⁽¹⁴⁾は、「悲しみの手紙」に脅かしの性格があったばかりでなく(1:23)、10-13章にも使徒的権威(10:8、13:10)を用いた脅かしの性格があり(10:11、13:2)、両者が手紙の性格上一致するこ

とを指摘した。さらに、L.L.Welborn⁽¹⁵⁾はWatsonを支持して、第二コリント書1-9章が「和解の手紙」であることを述べた後に、キケロ、アポロニウス、マルクス・アウレリウスなどの和解の手紙を吟味し、ギリシア・ローマ社会では和解は過ちなどを「意図的に忘れる行為の内にある」ことを確認し、2、7章の「悲しみの手紙」の記述に10-13章の論争的な議論の記述がないのは、「和解の手紙」の性格による、と結論づけた。

ここでは、J.Murphy-O'Conner⁽¹⁶⁾が正しくもWatson説を批判した積義的、歴史的な議論とは異なって、WatsonやWelbornが検討しておらず、また今まで検討されてこなかったことであるが、「悲しみの手紙」についての簡潔な叙述から、その手紙の内容と議論の概略を書簡理論の立場から再構成を試みてみたい。またその後、その結果得られる「悲しみの手紙」の書簡類型と既に検討済みである10-13章の書簡類型⁽¹⁷⁾と比較してみることにする。

「悲しみの手紙」が直接的に言及されている箇所は、2：3-4、9、7：8、12であるが、その内容と議論の概略を知るには、その手紙を読んだ直後のコリントの共同体の応答を述べた7：9-11が極めて重要である。その他、1：23-2：11、7：7-13にも「悲しみの手紙」が書かれた前後の状況やそれを受け取った前後の状況が記されている。

a. 「悲しみの手紙」の執筆の状況

パウロは第一回目のコリント滞在の後に、コリント再訪の計画を立てるが（Iコリント16：5-9）、それを変更して（IIコリント1：15-16）、再度コリントにやってくる。しかし、「悲しみの出来事」に遭遇して、予定を変更してエフェソに帰り、再び悲しみの心でコリントに行かない決意をする（1：23、2：1、3）。その代わりに「憂いと不安の心から、多くの涙を流して」（2：4）手紙を書いたのである。

「悲しみの手紙」の一つの目的は、厳しい叱責の言葉でコリントの共同体を悲しませるためではなく、厳しい言葉の背後にあるパウロの溢れるばかりの愛を知ってもらったためであった（2：4）。もう一つの目的は、コリントの共同体の人々がパウロの指示した言葉に従順であるかどうか、信頼関係が破綻しているか否か、すなわち使徒的権威が認められているか否かを見るためであった（2：9）。

さて、「悲しみの訪問」となり「悲しみの手紙」を書くきっかけとなった「悲しみの出来事」とは、何であったのか、詳細は不明である。これ

は「不正を行った者」(*ὁ ἀδικήσας*)と「不正を行われた者」(*ὁ ἀδικηθεὶς*) (7:12)と密接に関連するが、現在ではパウロの使徒職に対する侮辱と考えられている⁽¹⁸⁾。あるいは募金活動に対する疑惑が生じたことも関連していたのかもしれない⁽¹⁹⁾。

b. 「悲しみの手紙」に対する応答の分析

「悲しみの手紙」の内容と議論について詳細は不明である。しかし、コリントの共同体の手紙を受け取った直後の反応を詳細に分析することによって、その内容と議論の概略を跡付けることが可能であろう。

「悲しみの手紙」は、コリントの共同体に「悲しみ」をもたらした。しかし、「悲しみ」という「心の痛み」によって、コリントの共同体は真の「悔い改め」に導かれた(7:8)。ここにはコリントの共同体が神の前で罪を「悔い改める」という意味と、パウロとの関係の改善に心を「入れ換える」という意味の二通りのニュアンスが含まれているのであろう。

「神に従った悲しみ」すなわち「悔い改め」(7:8、9、10、参照)に導かれて、コリントの共同体には「熱心、弁明、怒り、恐れ、憧れ、熱意、懲らしめ」という反応が起こり、最後に彼らは「すべての点で自分自身が潔白であることを証明した」と簡潔な言葉で「悲しみの手紙」が読まれた直後の反応が記されている(7:11)。

①さて、「熱心」(*σπουδή*)とは元来は「速さ」を意味する言葉に由来するが、パウロは共同体への参与(*commitment*)を意味する言葉として用いている(8:7、8、16、ローマ12:8、11)⁽²⁰⁾。ここでは、コリントの共同体がパウロとの関係の修復に真剣であり⁽²¹⁾、和解を求め⁽²²⁾、あるいはパウロとの関係を修復するために不正を行った者を取り扱う⁽²³⁾のに「熱心」であるのかもしれない。しかし、最初に挙げられている「熱心」は、強調する言葉⁽²⁴⁾で導入される「弁明」から「懲らしめ」までとは区別され、「悲しみの手紙」に対する一連の反応の動機となっている言葉であり、コリントの共同体の参与を意味する言葉として用いていると思われる。

②従って、「悲しみの手紙」に対するコリントの共同体の最初の具体的な行為は、「弁明」(*ἀπολογία*)である。「弁明」は、単なる「弁解」を意味する言葉ではない。「弁明」は既にBarrettが正しく指摘してい

ることであるが⁽²⁵⁾、修辞学の専門用語であり（12：19、参照）、法廷弁論で「告発」（κατηγορία）に応答して自己弁護をする弁論を指す言葉である。ここでは、コリントの共同体が「不正を行った者」（7：12）の行為に関係していないという自己弁護を意味する言葉として用いられていると思われる⁽²⁶⁾。もしそうであるならば、パウロがコリントの共同体は不正に係わっていたのではないか、という誤った疑念を表明しており、それに対してコリントの共同体が疑念を晴らすことに成功した、というニュアンスが含まれるのである⁽²⁷⁾。

③コリントの共同体の二番目の具体的な行為は「怒り」（ἀγανάκτησις）である。これは「弁明」と深く関わる言葉である。コリントの共同体が疑惑を晴らした後に、「怒り」が生じたとするならば、その「怒り」の矛先は、共同体の評価に恥をもたらしたという理由で、自分たち自身に向かう⁽²⁸⁾と考えるよりは、当事者である「不正を行った者」に向かうと考える⁽²⁹⁾のが自然である。このような解釈は後で述べる「不正を行った者」に対する「懲らしめ」と整合性があり、一致する。

以上の「弁明」と「怒り」は、コリントの共同体と「悲しみの出来事」の当事者に関して「悲しみの手紙」に書かれていた事柄に対して、コリントの共同体の反応が記されていると思われる。その反応は自分自身に向かうと同時に、相手である当事者に向かう。これに「恐れ」「憧れ」「熱意」が続く。

④「恐れ」（φόβος）は、一般的な「不安」をも意味するが⁽³⁰⁾、ここでは単数形で表現されており、「恐れ」を意味すると思われる。しかし、「悲しみの手紙」を受け取って悔い改めた後に、「熱心」を動機として、「弁明」と「怒り」の後に至った反応として「恐れ」に至ったのであり、ここでは神の裁きへの「畏れ」を意味する⁽³¹⁾とは考えにくい。それよりも、パウロへの「恐れ」を意味する、と解釈する方が文脈と一致してくる。具体的には、パウロがコリントの共同体に使徒的権威を行使してくるかもしれないことに対する「恐れ」であり⁽³²⁾、それは「神の使徒」に対する「畏敬の念」というニュアンスを含むのかもしれない⁽³³⁾。以上のような解釈は、後で見る7：7の「恐れ」とも一致する。

⑤「憧れ」（ἐπιπόθησις）とは、明らかにパウロに対する「憧れ」であり、パウロが旅行計画を中断してコリント行きを控えていることに対し

て、コリントの共同体が再会したいというパウロに対する「憧れ」を意味している⁽³⁴⁾。それは、パウロを彼らの真の使徒として歓迎し、かつての関係を修復したい⁽³⁵⁾、というニュアンスが含まれているのかもしれない。あるいは、パウロのその意向に適うようにして、パウロを喜ばせたい⁽³⁶⁾、というニュアンスを含んでいるのかもしれない。いずれにせよ、パウロに対する態度を改めて (cf. 7 : 8, 9, *μετάνοια*)、パウロとの再会への「憧れ」が起こったのである。このような解釈は、7 : 7の「憧れ」とも一致する。

⑥「熱意」(*ζήλος*)は「熱心」と関連する「情熱」を表す言葉であるが、ここでは具体的な行為の現れとして用いられている。また、ここでは「恐れ」「憧れ」に続いて引き起こされた行為と考えると、神への「熱意」を含む⁽³⁷⁾、と解釈するよりは、パウロに対する「熱意」と解釈する方が文脈に沿っている。しかし、コリントの共同体がパウロの使徒的権威に敬意を表して、パウロの例に倣おうとしている⁽³⁸⁾、とは考えにくい。また、パウロの福音に立ち戻ったことをパウロに示し、パウロに反対した日の悪に対して「熱意」を示す⁽³⁹⁾、とも考えにくい。パウロに対する「熱意」とは、具体的には「悲しみの手紙」に示された指示に従って (2 : 9, 2 : 6, 「処罰」、7 : 11, 「懲らしめ」、参照)、パウロに従おうとする「熱意」を指すのであろう。もし、そうであるならば、7 : 7の「熱意」と一致する。

以上の解釈が正しければ、「恐れ」「憧れ」「熱意」は、「悲しみの手紙」に恐らく書かれていたコリントの共同体とパウロの関係に関する事柄に対する、コリントの共同体の応答である。これらに「懲らしめ」と「すべての点で自分自身が潔白であることを証明した」という結末が続く。

⑦「懲らしめ」(*ἐκδίκησις*)は、「懲らしめ」⁽⁴⁰⁾とも「復讐」⁽⁴¹⁾とも訳せるが、ここでは全体の文脈から、また2 : 6の「懲罰」(*ἐπιτιμία*)との関連から前者の方が適切である。「懲らしめ」という言葉は、「不正」(*ἀδικία*)という言葉と密接に関連するが、刑法の言葉から借用された言葉である⁽⁴²⁾。ここでは、パウロの福音に反する者であれば誰であれ罰する⁽⁴³⁾、という意味ではなく、「不正を行った者」を罰する⁽⁴⁴⁾、と解釈するのが適切である。もしそうであるとすれば、「悲しみの出来事」に関してコリントの共同体は基本的には潔白であったことを行為において

証明することになる。というのは、共同体が不正に係わっていたのであるならば、一人の人を処罰することができなかつたはずだからである⁽⁴⁵⁾。これは「怒り」が到達した結果を示していると思われる。

⑧一連の行為の結論として、「すべての点で自分自身が潔白であることを証明した」と結論づける。「潔白である」(ἀρῶνός εἶναι)は、「無垢である」という意味であるが(11:2、参照)、「弁明」と深く関係する言葉である。「すべての点で」とは、これ以前に列挙された行為において、という意味であろう。そうすると言葉の告白である「弁明」においても、「怒り」から「懲らしめ」に至る行動においても、「恐れ」「憧れ」「熱意」というパウロに対する態度の点においても、いずれの点においても「潔白」であることを示したのである。

c. 「悲しみの手紙」の発信後の状況

「悲しみの手紙」を書き送った直後のパウロは、厳しい言葉でコリントの共同体に手紙を書いて「悲しみ」を与えるからか、一時的にせよ、手紙を書き送ったことを「後悔した」(7:8)。そして、コリントからテトスが帰還しないばかりか、「悲しみの手紙」がどのような結果をもたらすのか、「不安」(7:5)であった。しかし、パウロはテトスと再会し、コリントの共同体の「悲しみの手紙」に対する反応を知って、慰められた(7:6、7a)。

テトスと再会した時に、コリントの共同体のパウロに対する「憧れ」「嘆き」「熱意」を聞いて、不安が解消し、後悔の念が去り、悲しみが喜びに変わった(7:7b)。この「憧れ」「熱意」は7:11で用いられている言葉と同じであるが、明らかに「悲しみの手紙」を読んだ後のコリントの共同体のパウロに対する態度を示しており、「嘆き」も同じ文脈の中で解釈されるべきであろう。

すなわち、「憧れ」(ἐπιπόθησις)は、パウロが正しいことを認めてパウロに再会したい⁽⁴⁶⁾、あるいは関係を修復したい⁽⁴⁷⁾、あるいはパウロを尊敬し、かつて生じた不祥事を悔いる⁽⁴⁸⁾、というニュアンスが含まれるのかもしれないが、パウロに会いたいというパウロへの憧憬が根本にある。「嘆き」(ὀδυρμός)は、コリントの共同体の行為がパウロとの関係に亀裂をもたらしたことへの「嘆き」⁽⁴⁹⁾、あるいは「悔い改め」に導く要因となった「嘆き」を指す⁽⁵⁰⁾、と考えるよりも、コリントの共同体のパウロに対する態度という文脈で一貫して解釈すると、パウロが旅行計画

を変更してコリントに来られなくなるばかりでなく、パウロがエフェソに滞在することがよいと考えていることに対する「嘆き」を意味する⁽⁵¹⁾。「熱意」(ζηλος)は、コリントの共同体がパウロの側にしっかりと立ち⁽⁵²⁾、パウロの意思を実行しようとし⁽⁵³⁾、不正を行った者を厳しく訓戒すること⁽⁵⁴⁾の中に見られるのであろう。以上のような「恐れ」「憧れ」「熱意」は、7:11のパウロに対する「恐れ」「憧れ」「熱意」とほぼ一致する。

「悲しみの手紙」の直後の応答は、先に詳細に分析したが、コリントの共同体の多数派は、「不正を行った者」に対して「懲罰」(2:6)を行い、「悲しみ」に崩れ落ちている。パウロは「懲罰」は十分であり、愛によって赦すように指示を与えている(2:7、8)。ここから示唆されることは、「悲しみの手紙」ではパウロの言葉に従順であるかどうかを知ることが、執筆の一つの目的であったことから、「不正を行った者」に対する厳しい処罰が示唆されていたのかもしれない。

d. 「悲しみの手紙」の書簡類型

「悲しみの手紙」の内容と議論の概略をコリントの共同体の応答を中心にして、手紙の執筆状況と発信後の状況も考慮に入れて、再構成してみると次のようになる。

第一に、「悲しみの手紙」によってパウロと当事者の関係を知ったコリントの共同体の人々は、「悲しみ」そして「悔い改めた」。すなわち、コリントの共同体に対する厳しい非難や叱責の言葉があったことが予測される。パウロは発信後に、後悔するほどであったことから、その内容の厳しさが予想される。厳しい言葉には当事者への処罰も示唆されていたのかもしれない。しかし、パウロの意図は、コリントの共同体を悲しませることでもなく、厳しい処罰を求めるためではなく、コリントの共同体に対するパウロの愛を知ってもらいたい点にあった。

第二に、コリントの共同体の人々は、当事者に関与したのではないかという彼ら自身の疑念に対して「弁明」し、また当事者に対して「怒り」を示し、「懲らしめ」た。パウロに対して再認識し、「恐れ」「憧れ」「熱意」を示し、これら「すべての点で彼ら自身が潔白であることを証明した」。すなわち、コリントの共同体が「弁明」の弁論と行動を一貫して示していることから、パウロが「不正を行った者」の当事者ばかりでなく、コリントの共同体がそれに加担したことで「告発」(κατηγορία)したことが予想される。

以上の二点はどのような関係にあるのだろうか。パウロの意図は悲し

ませることでも、処罰でもないことから、第二の点が議論の本論であり、第一の点はその本論に導くための議論であろう。もしそうであるならば、コリントの共同体に「悲しみの出来事」の経緯などを述べた部分は、「序論」(exordium)や「陳述」(narratio)に相当し、議論の中心部分である「論証」(probatio)は「告発」の形式で書かれていたと思われる。

このような「悲しみの手紙」の書簡類型は、偽デメトリウスの『書簡類型論』の分類によれば、「適切な限界を越えて行われたことを告発する」「告発の書」(κατηγορικὸς)の類型に属すると思われるが、偽デメトリウスは以下のような例文を挙げている⁽⁵⁵⁾。

私に反対することが言われているのを聞いて私は快く思わない。それは私の正しい行為にふさわしくないからである。しかし、彼が悪口を言う人であり嘘つきであると知りつつも、あなたが私に反対して言う人の側に身を置く時に、あなたも悪いのである。だが、一般的に言ってあなたは(私を)悲しませ続けている。全ての人の敵であると知っている人と友人になっているからである。しかも、彼があなたや他の人々と共にいる時に、他の人々が彼を告発することは、あなたに対して同じことをするのだ、ということ考えたこともない。それゆえ、私はこれらのことをしている彼を非難するが、あなたは思慮深いように見えながらも、友達のために裁かないので、あなたを非難する。

Watsonは、「悲しみの手紙」にも第二コリント書10-13章にも、「脅かしの書」として共通の性格を見い出している⁽⁵⁶⁾。他方、Windishも「悲しみの手紙」は「脅かしの書」の性格を持つことを示唆したが、10-13章が「脅かしの書」であることは否定した⁽⁵⁷⁾。偽デメトリウスによれば、「脅かしの書」(ἀπειλητικὸς)とは、「行われた事柄や行われうる事柄に対して、人々にひどく恐れを引き起こす」類型である⁽⁵⁸⁾。偽リバニウスによれば、「脅かしの書」は、「私たちがいる人を脅かす」手紙である⁽⁵⁹⁾。「悲しみの手紙」にも、先に見たように「恐れ」や「懲らしめ」のモチーフが見られるが、それはパウロの真意ではない。「弁明」のモチーフの方が、主たるモチーフであり、「悲しみの手紙」は第一義的に「告発の書」であり、その中に「脅かしの書」の文体も用いられていたと思われる。

e. 「悲しみの手紙」と第二コリント書10-13章の書簡類型の比較
 さて、以上の分析が正しければ、「悲しみの手紙」の書簡類型は「告発の書」に分類され、そこには「脅かしの書」の文体も併せ用いられている、という結論に導かれた。第二コリント書10-13章の書簡類型は、既に他の所で分析したので詳しいことは繰り返さないが⁽⁶⁰⁾、「弁明の書」であり、その核心部分には「アイロニーの書」の文体が用いられ、始めと終わりには「願いの書」と「脅かしの書」の文体が用いられているのである。

これらのことから、書簡理論の視点で分析すると、「悲しみの手紙」と第二コリント書10-13章の間には、「脅かしの書」という文体が共通に用いられている面もあるのではあるが、それは書簡類型という上では第一義的な問題ではない。この点から両者の類似性という議論が出てくるのではあるが、両者は「告発の書」と「弁明の書」という全く相反する書簡類型に分類され、「悲しみの手紙」と第二コリント書10-13章を同一視することはできないのである。

3. 修辞学の視点から見た1-9章と10-13章の関係

Zahn-Kümmelに代表される統一説は、20世紀には少数派であり続けてきたが、最近になって新たな展開を見せ、とりわけ、修辞学の視点から1-9章と10-13章が統一した手紙である、という新たな説がいろいろと唱えられ始めている。

まず最初に、F. YoungとD. F. Fordは、第二コリント書全体がパウロの使徒職に対する「弁明」(ἀπολογία)であり、10-13章はその「結論」(peroratio)に相当すると考え、1-9章と10-13章の語調の違いは、「結論」では「感情」(πάθος)に訴えるので10-13章の語調は1-9章と異なると説明する。また、このような構造を持った手紙の並行事例としてデモステネースの手紙を例に挙げる⁽⁶¹⁾。B. Witheringtonは、YoungとFordの指摘に基づいて統一説を採用し、社会修辞学的な視点で注解書を書き上げる⁽⁶²⁾。しかし、10-13章を「感情」だけで説明するのは無理である。また、10-13章は書簡理論の立場で見ても、修辞学の立場で見ても、一つの纏まった手紙の単位を形成している⁽⁶³⁾。

次に、これらの流れとは異なるが、同じく修辞学の立場で、McCantは、J. A. Judgeの第二コリント書10-13章は、ヘレニズム社会の自己宣伝のパロディである⁽⁶⁴⁾、という説を拡大して、第二コリント書全体が「パロディ的弁明」である、という説を唱えるが、そこでも1-9章と

10-13章は統一した手紙である、という統一説に立つ⁽⁶⁵⁾。さらに、D.J.H.Amadorは“communicative dynamics”という視点で統一説を擁護し、修辞学という全く新しい視点で統一説を積極的に展開する⁽⁶⁶⁾。McCantとAmadorは、1-9章と10-13章には、主要な議論のテーマが同じように見られる、という点を統一説の根拠としている⁽⁶⁷⁾。

以下では、1-9章と10-13章に主要なテーマが同様に見られる、ということ論拠にした統一説の議論に対して、修辞学の立場で批判的に吟味することを目的とする。それは、同時に分割説にも適用されて、10-13章を「悲しみの手紙」と同一視する立場を別の角度から批判することにもなるであろう。

a. 第二コリント書1-9章と10-13章の中心的なテーマ

第二コリント書の中心的なテーマは、Bultmannが既に正しく指摘したように「誇り」である⁽⁶⁸⁾。新約聖書には、「誇る」(καυχᾶσθαι)・「誇り」(καύχημα)・「誇ること」(καύχησις)という言葉が59箇所用いられているが、その内で54箇所が真筆のパウロの手紙⁽⁶⁹⁾で用いられ、しかも第二コリント書では29箇所と他の手紙と比較して著しく多く見られる。ここからも明らかになるように、第二コリント書では「誇り」が書簡全体の鍵概念の一つとなっている。

しかも、既に私が行った修辞学的分析によると、1:12-14は1-9章の議論の中心的なテーマが何であるかが語られる「命題」(propositio)と分析されるが、そこでは「誇り」が議論の中心的なテーマとされている⁽⁷⁰⁾。また、10-13章が別な手紙であるという視点から分析すると、10:12-18が10-13章の議論の中心的なテーマが取り扱われる「命題」と分析されるが、そこでも「誇り」が議論の中心的なテーマであるとされている⁽⁷¹⁾。このように修辞学的視点で分析すると、第二コリント書では一貫して「誇り」が中心的なテーマとして取り扱われているのである。

また、McCantやAmadorも、統一説の根拠とする1-9章と10-13章に共通に見られる重要なテーマの一つに「誇り」の問題を挙げている。しかし、ここでは既に20世紀の初頭にKennedyが分割説を唱えた際に、1-9章での「誇り」と10-13章での「誇り」に取り扱い方に違いがあることを指摘し⁽⁷²⁾、またそれを継承したPlummerらが1-9章と10-13章の矛盾する点の一つとして取り上げた古い問題⁽⁷³⁾を修辞学の視点で新たに取り上げることにする。

尚、「誇る」⁽⁷⁴⁾という動詞から派生した名詞には二つあり、元来「誇

り」(καύχημα)⁽⁷⁵⁾は、「誇りの対象となるもの」「誇りの理由」「誇りの根拠」などを意味する言葉であり、「誇ること」(καύχησις)⁽⁷⁶⁾は、「誇る行為」を意味する言葉であるが、パウロは時折これらの区別をしないで用いる⁽⁷⁷⁾。

b. 第二コリント書1-9章の中心的なテーマとその展開

第二コリント書1-9章で、パウロとコリントの共同体の関連で、パウロが使徒職との関連で「誇り」に関連する言葉を用いているのは、1:12-14、5:12の2箇所である。それ以外の箇所では、共同体を誇る、という意味で用いられているので(7:4、14[dis]、8:24、9:2、3、4)、ここでは考察の対象から外す。また、「誇り」と深く関連する「自分自身を推薦する」という自己推薦の言葉が⁽⁷⁸⁾3:1、4:2、5:12、6:4の4箇所で用いられている。

① 1:12-14 (命題 [Propositio])

ここは修辞学的議論で展開される事柄の要点が述べられる「命題」に相当する箇所であるが、第二コリント書でパウロの「誇り」が述べられている最初の箇所でもある。パウロの「誇り」は、第一に「純潔さ」(1:3、参照)と「誠実さ」によって宣教活動に従事してきたことにある(1:12)。これは、パウロの宣教活動に対して、動機が不純であるという非難があり(2:17、「神の言葉を曲げ」)、募金活動や自給自足の宣教活動に対する疑念と誤解があり(4:2、「悪賢さ」)、それらの非難や疑惑や誤解にに対して弁明する発言である。第二に「人間的な知恵」によるのではなく、「神の恵み」によって宣教活動をしてきたことにもある。パウロの誇る使徒としての宣教活動は、キリストの福音そのものがそうであるように「神の恵み」によるのである。使徒としての「誇り」は、福音の「誇り」と二重写しなのである。パウロはそれらをここで「良心も証しする」と述べて、コリント人に訴える前に、心の内側で批判的に吟味する自分の「良心」⁽⁷⁹⁾に訴えて疑惑に対して潔白であることを強調し、パウロが自分の使徒職と福音に「誇り」を持っていることを明らかにする。

パウロが第二コリント書を書いた理由は、コリントの共同体が手紙を読んで、パウロが使徒であることを「完全に理解する」ことにある(1:13)。すなわち、現在は誤解されているので、その誤解を解いてよく理解してもらおうことにある。それは終末の日にパウロが神の前でコリント

の共同体を「誇る」ように、コリントの共同体がパウロを「誇る」ようになることが、究極の目的である。すなわち、現在はパウロに対する誤解や中傷のためにパウロを「恥」と思っているコリントの共同体に、パウロを「誇る」ようにさせることが以下で展開する議論の要点である（1：14）。以下では、「誇り」のテーマの展開を具体的に跡付けていく。

②3：1（論証〔Probatio, 第一証明〕の導入部）

次に、「誇り」の類似的表現である「自分自身を推薦する」という語句が、使徒として語る資格（使徒職）についての論証〔第一証明〕の導入部分に、修辭的疑問文で用いられている。「再び」「（自己推薦を）始めようとしている」という語句は、これより以前にパウロが自己推薦をしていると非難されていたことを示唆する。しかし、それがいつであるか特定することは難しい。だが、第一コリント書で「私に倣う者になりなさい」（4：14、11：1）とパウロが語ったのを批判した時⁽⁸⁰⁾ではない。表現が異なるからである。第二コリント書10-13章の自己推薦を意味する⁽⁸¹⁾のでもない。10：12、18などでは自己推薦を否定しているからである。むしろパウロが「悲しみの出来事」に遭遇した時に、自己宣伝である、と批判された可能性の方が高い⁽⁸²⁾。パウロはここで自己推薦を否定している⁽⁸³⁾のではない。自己推薦を前提にした上で、あなたがたが推薦状である、と直後で肯定しているからである。また、「自分自身を推薦する」は単なる自己紹介を意味している⁽⁸⁴⁾のでもない。ここでは、「パウロは自己推薦（すなわち自己賛美）をしている」という、かつてなされた非難を避けようとしているのである。しかし、かつてなされた非難を弁明の議論の導入に用いるのである。

③4：2（論証〔Probatio, 第一証明〕の結論部）

さらに、かつての非難が根も葉もないことを明らかにするために述べた使徒として語る資格があるという論証の結論に移行する箇所で、再度「自分自身を推薦する」という表現が用いられる。すなわち、パウロが批判されていたと思われる「恥ずべき隠れた行い」とは縁がないことを断言し、金銭的疑惑に関連した「悪賢さ」によって宣教活動に従事しておらず、不純な動機で神の言葉を語って「神の言葉を曲げていない」ことを明確に述べた直後に「自分自身を推薦している」と自己推薦を積極的に推進していることが語られる。それは「（福音の）真理を現わすこ

とによって」裏付けられているとする。ここでも福音の内容と使徒職が二重に描き出されている（1：12、参照）。その対象は「神の前で人々の全ての良心に対して」である。パウロはこの段階では、自分の良心に対して（1：12、参照）ではなく、それよりもさらに進んで、一般的な他人の「良心」（「全ての良心」）⁽⁸⁵⁾に対して、自己推薦を積極的に展開する。

④ 5：12（論証〔Probatio, 第二証明〕の導入部）

三番目の自己推薦の言葉は、新たな論証に入る導入部で用いられる。「再び私はあなたがたに自分自身を推薦しているのではない。」ここでパウロは「あなたがた」以外の人々に自己推薦しようとしている⁽⁸⁶⁾のではなく、自己推薦を否定している⁽⁸⁷⁾のでもなく、自己紹介を繰り返す必要がないことを述べている⁽⁸⁸⁾のでもない。また、4：2、6：4の自己推薦を積極的に肯定している言葉と矛盾するように見える。しかし、修辞学的分析から明らかになることであるが、パウロはここでも3：1と同様に論争相手の非難の言葉を導入として、新たな弁明の議論を始めようとしているのである。それはこれに続く議論の結論へ移行する部分で（6：4）積極的に自己推薦を述べ、3：1→4：2／5：12→6：4と同じ議論のパターンを二度繰り返していることから明らかである。

さらにパウロは「自分自身を推薦する」ことではなく、パウロについて「誇る」機会をコリントの共同体に与えることがその目的であるとする（1：14、参照）。要点は、パウロが自分について「誇る」のではなく、コリントの共同体がパウロを「誇る」ことにある。しかも「誇り」には「顔における誇り」と「心における誇り」の二種類があり、自分自身について「顔において（すなわち、外面的なことで）誇る」パウロの論敵に対して、コリントの共同体がパウロについて「心において（すなわち、内面的なことで）誇る」ように変わることが議論の究極的な目的なのである。

⑤ 6：4（論証〔Probatio, 第二証明〕の結論部）

1-9章で「自分自身を推薦する」という表現が最後に用いられるのは、福音の内容についての弁明の結論に移行する箇所、短い「苦難のリスト」が挙げられる直前の導入部分である。「務めが咎められないためにだれにも何も責めない」ことと対比的に「あらゆる点で自分自身を推薦している」と積極的に自己推薦が述べられている。パウロが自己推

薦を行うのは「神に仕える者として」すなわち使徒としてである。「あらゆる点で」は、具体的には「苦難のリスト」(6:4b-10)を指している。すなわち、使徒としての生活の全領域を意味する。パウロにとって使徒として福音の真理を伝えることと自己推薦は絶えず密接な関係にあったのである(4:2、参照)。先に述べたことであるが、3:1・5:12で自己推薦を否定し、4:6・6:4で自己推薦を否定し、この点においてパウロは矛盾している⁽⁸⁹⁾のではない。また、その矛盾を解くために、「あらゆる点で(推薦する)」は手紙全体に書かれていることを指す⁽⁹⁰⁾とか、パウロが拒むのは論敵の外面的な霊的経験である⁽⁹¹⁾と考える必要はない。

以上から明らかなように、3:1・5:12では、論敵が非難した自己推薦の言葉を弁明の議論の導入に用いて、4:2・6:4ではそれぞれの弁明の結論に移行する部分で、(福音の内容が「誇り」であり、内面的な事柄であることと密接に関係して)、自己推薦を積極的に述べるのである。もしそうであるならば、かつて自己推薦をしていると批判されたパウロが、1-9章で、とりわけ2:14-7:4の「弁明」で、どのように巧みに議論を展開しようとも、積極的に自己推薦をする、という基本的な姿勢が変わっていない限り、もう一度批判される可能性が生じるのである。

c. 第二コリント書10-13章の中心的なテーマとその展開

第二コリント書10-13章で、パウロが「誇り」に関連する言葉を述べているのは、10:8、13、15、16、17(dis)、11:10、12、16、17、18(dis)、30(dis)、12:1、5(dis)、6、9の19箇所であり、それとほぼ同義の「自分自身を推薦する」という表現は、10:12、18、12:11の3箇所である。

①10:8 (序論 [Exordium])

10-13章で「誇り」に関する言葉が最初に現れるのは、10:8であり、これは修辞学的視点では、「序論」(10:1-11)の中で議論のテーマを前もって告知する箇所として分類される⁽⁹²⁾。すなわち、使徒的権威について「大いに誇ったとしても、恥にはならないであろう」と述べる。使徒的権威は神によって与えられたものであり、「限度を越えて誇らず」「主にあって誇る」ものである。10-13章のテーマは「主にあって誇る」

「誇り」である。とりわけ、それは所謂「愚か者の語り」(11: 1-12: 10)の中で展開される。

②10: 12-18 (命題 [Propositio])

パウロは議論の要点を述べる「命題」の中で、中心的なテーマが「誇り」であることを述べるのであるが、それを修辞学的な「比較」(*σύγκρισις*)⁽⁹³⁾を用いて、論敵の「誇り」とパウロの「誇り」を描き分ける。

まず第一に、論敵は「自分自身を分類し、比較し」あるいは「自分自身を量り、比較し」「自分自身を推薦する人々」として描かれ、それと比較してパウロ自身は、このようなことを敢えて行わないことが断言される(10: 12)。そして、使徒の基準として「自分自身を推薦する人」ではなく、「神が推薦する人」であることが、議論の要点として最後に指摘される(10: 18)。すなわち、「推薦」には二種類あり、自己推薦は否定され、神からの推薦が肯定される。

第二に、「誇り」そのものについては、「限度を越えて誇らない」ことが二度繰り返されて強調される(10: 13, 15)。すなわち、異邦人宣教の領域とユダヤ人宣教の領域というように割り当てられた領域を越えて侵入して「誇る」こともせず、他人の宣教成果を自分のものであるかのように「誇る」こともしない⁽⁹⁴⁾。また、「限度を越えて誇らない」をさらに具体化して、未開拓でない「既に準備された業績を誇る」ようなこともしない(10: 16)。このように論敵の「誇り」と比較して、パウロは「誇らない」という否定形を用いて自分の立場を述べる。そして、限度を越えて「自分を誇る人」ではなく、「主にあって誇る」人が使徒の基準であることを、議論の要点として指摘する(10: 17)。すなわち、「誇り」にも二種類あり、「限度を越える」「人間的な誇り」は否定され、「限度を越えない」「主にある誇り」が肯定される。

以上から、1-9章と10-13章では、自己推薦の問題が明らかに異なることが分かる。すなわち、前者では積極的に述べられ、後者では論敵の問題として描かれ、自分自身の問題として否定されるからである。また、1-9章と10-13章では、「誇り」の取り扱いが、明確に違うことが分かる。1-9章では、「誇り」が積極的に述べられているが、10-13章では「限度を越えない」という一定の歯止めが掛かっているばかりではなく、「誇らない」という否定形で述べられているからである。以下では、その具体的な展開を見ていく。

③11：10、12（陳述 [Narratio]）

パウロはコリントの論敵が問題を引き起こした経緯を述べる「陳述」の中で、自給自足の宣教活動に対する「誇り」を二度にわたって述べている（11：10、12）。パウロはコリントの共同体から献金を受けることを拒んで自給自足の生活をしてきたが、拒むことによってキリストに仕えることに与るのであれば、「主にある誇り」と考えられるかもしれない⁽⁹⁵⁾。しかし、パウロは宣教活動を支えた自給自足の生活という経済面に関しては、一貫して「誇り」を持ち続けている（I コリント 9：15、参照）。パウロにとって「限度を越えない誇り」に数えられていたのであろう。

④11：16－18、30、12：1－11（論証 [Probatio]）

パウロは、「限度を越えて誇らない」「主にあって誇る」という「誇り」の基準を明確に定めているのではあるが、論敵が「限度を越えた」「人間的な誇り」（10：12、参照）をしていたので、「主に従って」語る（11：17）のではなく、論敵と「比較」して「肉に従って誇る」という“危険な誇り”⁽⁹⁶⁾を敢えて試みる（11：18）。だが、それには「限度を越えて誇らない」ようにするために、以下に見るようにいくつもの「アイロニー」⁽⁹⁷⁾に満ちた方法が順序を追って段階的に導入される。このようにして、「命題」であげた使徒の基準に適う人として使徒であることが論証される。

第一に、「愚か者として誇る」（11：16）。パウロは「賢い」（11：19。I コリント 4：10、10：15、参照）と自認するコリントの共同体の人々に対して、敢えて「愚か者」（11：16、19、12：11）となり、「愚かさ」（11：1、17、21）の中で語る。こうして、「愚か者として誇る」ことで、ユダヤ人としての「誇り」を持つ論敵と「比較」して、劣るところはないことを明らかにする（11：22）。

第二に、「気が触れた者のように語る」（11：23）。「気が触れた者」は「愚か者」よりも一層アイロニーが加わるが、パウロはこの手法を用いて、「キリストに仕える者」としては論敵と「比較」して、彼ら以上であることを詳細な「苦難のリスト」（11：23－29）によって、明らかにする。以上の二段階は、自分から「誇る」方法である。

第三に、「誇らなければならない」（11：30、12：1）「あなたがたが私に強いた」（12：11）という表現で、強いられて誇る。これは自己推薦ではなく、第三者からの推薦に近い立場を取る方法であるが、アイロ

ニーを用いた方法である。パウロは強いられて誇る中で、「弱さを誇る」ことを語るが、それは人間的な経験（11：30以下）と神的な経験（12：1以下）に分けられる。

第四に、三人称を用いて、第三者として誇る（12：2-5）。自分の経験を第三者として語り、自分の経験として否定するのは、さらに強いアイロニーである。パウロは神的な「弱さを誇る」と対比的に、「第三の天」にまで挙げられた神的な経験を三人称で語り（12：2-4）、第三者を誇って自分を誇らない（12：5）。しかし、ここでも強さを誇る論敵と「比較」して、パウロの霊的経験が彼ら以上であることが示唆される。

第五に、「弱さを誇る」（11：30、12：5、9）。「弱さを誇る」は論敵の霊的強さを誇ることへの強いアイロニーであり、「愚か者として誇り」強いられて誇ることによって至ったアイロニーのクライマックスである。人間的な経験としてダマスコ逃亡による失敗（11：32-33）が語られた後に、神的な経験として肉体の刺の経験（11：7-9）が語られる。この神的な経験の中で、「主を誇る」ことに至る。すなわち、「弱さ」と「苦難」にあって「主を誇る」（12：10）。

このように、「愚か者」となることから次第にアイロニーを強めながら、巧みな手法を用いて“危険な誇り”をしながら「限度を越えて誇らない」。しかし、最後には自分で語るよりは「あなたがたから推薦されるべきであった」（12：11）と結び、さまざまな点で「大使徒たち」と「比較」して劣らないことを明らかにしたと述べる。こうして、コリントの共同体が、再びパウロを使徒として認めて「誇り」、共同体の秩序を回復することが願われる。

d. 第二コリント1-9章と10-13章の関係と「自己称賛」・「アイロニー」

以上、詳細に見てきたように、第二コリント書1-9章と10-13章の中心的テーマである「誇り」と自己推薦の取り扱いには、相違があることが明らかになった。パウロは自己推薦に関して、前者では肯定し、後者では否定する。「誇り」について、前者ではパウロ自身の「誇り」が、コリントの共同体全体のものとなるように論証し、後者では「限度を越えて誇らない」「主にあって誇る」という原理を打ち立てて、具体的にはアイロニーに満ちた方法を用いて「誇る」。

なぜパウロは1-9章と10-13章の間で、「誇り」や自己推薦に関す

る議論の方法や評価を変えるのであろうか。なぜ1－9章では自己推薦を押し進めるのに対して、10－13章では、アイロニーに満ちた方法に戦術を変えるのであろうか⁽⁹⁸⁾。

それは、1－9章の執筆状況と10－13章の執筆状況が同じではなく、その間に「誇り」や自己推薦の議論の方法や評価を変え、自己推薦に基づいた弁明からアイロニーに満ちた弁明に戦術を変えざるを得ない状況が生じた、としか考えざるを得ないのである。とりわけ、自己推薦を一方で肯定し、他方で否定しているのは、統一した同一の手紙とは考えられない。また、その際に、10－13章が先に書かれたとも考えられない。自己推薦に関して一旦否定した原理を後で採用するとは考えられないからである。すると1－9章が先に書かれ、その後で10－13章が書かれた可能性が極めて高いのである。そして、1－9章が書かれた後に、再度パウロは非難されたことが示唆されるのである。それは、先に指摘したことであるが、自己推薦に基づいた弁明はいかに巧みであろうとも、将来また非難される可能性があったからである。

それではパウロはなぜ、1－9章でかつて非難された自己推薦に基づいて弁明の手紙を書き送ったのであろうか。ギリシア・ローマ社会では、自己推薦は必ずしも非難されることではなかった。自分で自分自身を讃える「自己賛美」(περιαντολογία)⁽⁹⁹⁾は、ギリシア・ローマ社会で、絶えず憎むべきことであり、不正なことであると考えられていた。それは、その中で他者を貶すことが含まれていると考えられていたからである。しかし、プルタルコスによれば、以下の場合には例外的に「自己賛美」が許されると考えられていた。

- (1) 公的に価値ある業績を達成できると考えられる場合⁽¹⁰⁰⁾。
- (2) 中傷されたり非難された者が、自分の名誉を守る場合⁽¹⁰¹⁾。
- (3) 不運な者が、意欲や勇気を証して、憐れみの感情を取り除く場合⁽¹⁰²⁾。
- (4) 厳しく取り扱う者に対して正義を求める場合⁽¹⁰³⁾。
- (5) 非難されていることの反対のことが、恥であり、悪である場合⁽¹⁰⁴⁾。
- (6) 聴衆に張り合いや意欲をもたせるような何か益がもたらされる場合⁽¹⁰⁵⁾。
- (7) 聴衆を威圧し抑制し、がんこで向こう見ずな者を謙遜にし服従させる場合⁽¹⁰⁶⁾。
- (8) 公的、私的な敵を威圧し、友の精神を高揚させる場合⁽¹⁰⁷⁾。

- (9) 誤った称賛によって、張り合いや悪を生じさせて傷をつけたり破滅させたりし、不健全な方針を採用することになった時に、それに反対する行為を行い、聴衆の目的をそこから逸らせる場合⁽¹⁰⁸⁾。

パウロの福音の内容に伴う「自己推薦」は、論敵から「自己賛美」と受け取られたのであろう。(恐らく、それは「悲しみの出来事」の時であり、直接的に当事者に関して「告発の書」である「悲しみの手紙」を書いていたのではあるが。) それに対して、「自己賛美」も受け入れられる場合があることを想定しながら、「自己推薦」を基調にしてパウロの使徒職と福音の内容に関する「弁明」の言葉(2:14-7:4)を含む、1-9章を書き送ったのであろう。

それでは、なぜパウロは10-13章で「自己推薦」を止めて、アイロニーに満ちた方法で「誇る」という戦術を取るように変更したのであろうか。アイロニーは、非難や告発などの弁論でしばしば用いられてきたが、それは論敵が誇ることを逆手にとって嘲ったりする時に用いられ⁽¹⁰⁹⁾、さらに話し手がひどい取り扱いを受け、その人の業績が他人に転化されそうになったり、名誉が毀損されそうになる時に用いられる方法であった⁽¹¹⁰⁾。パウロが10-13章で、アイロニーに満ちた方法で「誇る」のは、その直前に、恐らく侵入者によって、再度厳しい非難を受け、パウロが使徒である名誉(誇り)が毀損されそうになったので、アイロニーという手段に訴えざるを得なくなったのである。

註

*本稿は、2000年9月7、8日に立教大学で開催された日本新約学会第40回学術大会で発表した原稿そのものである。本稿の具体的なきっかけは、前年の同学会で拙稿「第二コリント書10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」(『ペディラヴィウム(原始キリスト教とヘレニズム文庫紀要)』第50号〔1999年〕、1-25頁、所収)を発表した際に、西南学院大学の須藤伊知郎講師から出された第二コリント書1-9章と10-13章の関係についての問いであり、それに答えるものである。本稿の2.の議論の大筋は、その場で口頭で答えたものであり、3.の議論の要点はその直後に私信で答えたものであり、それらを詳細に展開したものである。須藤講師を始め、今回の発表に対して質疑をして下さった方々にも感謝の意を表したい。尚、紙幅の関係で本稿を約半分に要約したものは、『新約学研究』第29号(2001年)に掲載予定。

- (1) 研究史については、以下に詳しい。H.D.Betz, *2 Corinthians 8 and 9*, Philadelphia: Fortress, 1985, 3-36; R.Bieringer, "Teilungshypothesen zum 2. Korintherbrief: Ein Forschungsüberblick," R.Bieringer & J.Lambrecht (eds.), *Studies on 2 Corinthians*, Leuvan: Leuvan Univ.Press, 1994, 67-105; idem, "Der 2. Korintherbrief als ursprüngliche Einheit: Ein Forschungsüberblick," Bieringer & Lambrecht (eds.), *Studies*, 107-130.
- (2) 「悲しみの訪問」「悲しみの出来事」「悲しみの手紙」は、それぞれ「中間時の訪問」「中間時の出来事」「中間時の手紙」あるいは「涙の手紙」とも称されるが、ここでは「悲しみの訪問、出来事、手紙」に統一して表記する。
- (3) J.S.Semler, *Paraphrasis II: Epistolae ad Corinthios*, Halle: Hemmerde, 1776; H.Windish, *Der zweite Korintherbrief*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1924.
- (4) C.K.Barrett, *A Commentary on the Second Epistle to the Corinthians*, London: A.& C.Black/New York: Harper & Row, 1973; idem, *Essays on Paul*, London: SPCK, 1982; V.P.Furnish, *II Corinthians*, Garden City: Doubleday, 1984; R.P.Martin, *2 Corinthians*, Waco: Word Books, 1986; M.E.Thrall, *A Critical & Exegetical Commentary on the Second Epistle to the Corinthians*, Edinburgh: T.& T.Clark, 1994.
- (5) Barrett, "Titus," idem, *Essays*, 118-131.
- (6) Furnish, *2 Cor.*, 32.
- (7) A.Hausrath, *Der Vier-Capitel-Brief des Paulus an die Korinther*, Heidelberg: Bassermann, 1870; J.H.Kennedy, *The Second and Third Epistle of St Paul to the Corinthians*, London: Methuen, 1900; idem, "The Problem of Second Corinthians," *Hermathena* 12 (1903), 340-367.

- (8) A.Plummer, *A Critical & Exegetical Commentary on the Second Epistle of St Paul to the Corinthians*, Edinburgh: T.& T.Clark, 1915; R.H.Strachen, *The Second Epistle of Paul to the Corinthians*, London: Hodder & Stoughton/New York: Harper & Brothers, 1935; J.Héring, *The Second Epistle of Saint Paul to the Corinthians*, London: Epworth Pub.Co., 1967; G.Dautzenberg, "Der zweite Korintherbrief als Briefsammlung: Zur Frage der literarischen Einheitlichkeit und des theologischen Gefüges von 2 Kor.1-8," *ANRW* II 25/4 (1987), 3045-3066.
- (9) J.Weiss, *Das Urchristentum*, R.Knopf (Hg.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1917, 245-272; R.Bultmann, *Exegetische Probleme des zweiten Korintherbriefes*, Uppsala: Wretmann, 1947 (= idem, *Exegetica*, E.Dinkler (Hg.), Tübingen: J.C.B.Mohr, 1967, 298-322); idem, *Der zweite Brief an die Korinther*, E.Dinkler (Hg.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1976.
- (10) W.Smithals, *Die Gnosis in Korinth: Eine Untersuchung zu den Korintherbriefen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1956, 90-91; idem, "Die Korintherbriefe als Briefsammlung," *ZNW* 64 (1973), 263-288; G.Bornkamm, *Die Vorgeschichte des sogenannten zweiten Korintherbriefes*, Heidelberg: Carl Winter, 1961 (= idem, *Geschichte & Glaube II, Gesammelte Aufsätze IV*, München: Kaiser, 1971, 162-194); idem, "The History of the Origin of the So-called Second Letter to the Corinthians," *NTS* 8 (1962), 258-264; D.Georgi, *Die Gegner des Paulus im 2. Korintherbrief: Studien zur religiösen Propaganda in der Spätantike*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1964 (= idem, *The Opponents of Paul in Second Corinthians*, Philadelphia: Fortress, 1986); idem, *Der Armen zu Gedenken: Die Geschichte der Kollekte des Paulus für Jerusalem* (2.Aufl.), Neukirchen-Vluyn: Neukirchner Verlag, 1994 (1.Aufl., 1965); Betz, *2 Cor.*
- (11) T.Zahn, *Einleitung in das Neue Testament*, (3.Aufl.) Leipzig: A.Deichert'sche Verlagsbuchhandlung Nachf., 1906 (1.Aufl.1897); W.G.Kümmel, *Introduction to the New Testament*, London: SCM Press, 1975, 279-293.
- (12) W.H.Bates, "The Integrity of II Corinthians," *NTS* 12 (1965), 56-69; P.E.Hughes, *Commentary on the Second Epistle to the Corinthians*, Grand Rapids: W.B.Eerdmans Pub.Co., 1962; G.Stephenson, "A Defence of the Integrity of 2 Corinthians," *The Authority and Integrity of the New Testament*, London: SPCK, 1965, 82-97; N.Hyldahl, "Die Frage nach der literarischen Einheit des zweiten Korintherbriefes," *ZNW* 64 (1973), 289-306; R.Bieringer, "Plädoyer für die Einheitlichkeit und inhaltliche Argumente," Bieringer & Lambrecht, *Studies*, 131-179; J.Lambrecht,

Second Corinthians, Collegeville: The Liturgical Press, 1998.

- (13) Kümmel, *Introduction*, 290.
- (14) F. Watson, "2 Cor. x-xiii and Paul's Painful Letter to the Corinthians," *JTS* n.s.35 (1984), 324-346.
- (15) L.L. Welborn, "The Identification of 2 Corinthians 10-13 with the Letter of Tears," *NovT* 37 (1995), 138-153 = "A Conciliatory Convention and Paul's Reference to the 'Letter of Tears'," idem, *Politics and Rhetoric in the Corinthian Epistles*, Macon: Mercer Univ. Press, 1997, 77-94.
- (16) J. Murphy-O'Conner, "The Date of 2 Corinthians," *Australian Biblical Review* 39 (1991), 31-43.
- (17) 山田耕太「第二コリント書10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」『ペディラヴィウム』第50号(1999年)1-25頁。
- (18) Barrett, "O ADIKHSAS (2 Cor. 7.12)," idem, *Essays*, 108-117.
- (19) Thrall, *2 Cor.*, 68-69.
- (20) G. Harder, "σπουδάξω κτλ.," *TDNT* vol.7 (1971), 559-568.
- (21) Hughes, *2 Cor.*, 274.
- (22) Bultmann, *2 Kor.*, 61.
- (23) Windish, *2 Kor.*, 234; Bultmann, *2 Kor.*, 61; Thrall, *2 Cor.*, 493.
- (24) 「弁明」から「懲らしめ」まで、それぞれの言葉の前に置かれた“ἀλλά”は、強調の言葉、cf. F. Blass, A. Debrunner & F. Rehkopf, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984, § 448(6).
- (25) Barrett, *2 Cor.*, 211.
- (26) Plummer, *2 Cor.*, 222.
- (27) Windish, *2 Kor* 3., 235; Thrall, *2 Cor.*, 494.
- (28) Plummer, *2 Cor.*, 223; Strachen, *2 Cor.*, 129; Hughes, *2 Cor.*, 274; Thrall, *2 Cor.*, 494.
- (29) Héring, *2 Cor.*, 55; Barrett, *2 Cor.*, 211; Bultmann, *2 Kor.*, 61; Furnish, *2 Cor.*, 395; Thrall, *2 Cor.*, 494.
- (30) Furnish, *2 Cor.*, 389. Cf., 7:5, ἔσωθεν φόβος.
- (31) Héring, *2 Cor.*, 55; cf. Plummer, *2 Cor.*, 223.
- (32) Windish, *2 Kor.*, 235; Barrett, *2 Cor.*, 211; Thrall, *2 Cor.*, 494.
- (33) Martin, *2 Cor.* 235.
- (34) Plummer, *2 Cor.*, 223; Thrall, *2 Cor.*, 494.
- (35) Hughes, *2 Cor.*, 274; Martin, *2 Cor.*, 235.
- (36) Furnish, *2 Cor.*, 389.
- (37) Plummer, *2 Cor.*, 223.
- (38) Hughes, *2 Cor.*, 275.
- (39) Martin, *2 Cor.*, 235.
- (40) Plummer, *2 Cor.*, 223; Barrett, *2 Cor.*, 211.

- (41) Thrall, *2 Cor.*, 494; Lambrecht, *2 Cor.*, 131.
- (42) Windish, *2 Kor.*, 235; Bultmann, *2 Kor.*, 61; Barrett, *2 Cor.*, 211; Martin, *2 Cor.*, 236; Thrall, *2 Cor.*, 494.
- (43) Martin, *2 Cor.*, 236.
- (44) Plummer, *2 Cor.*, 223.
- (45) Windish, *2 Kor.*, 235; Thrall, *2 Cor.*, 494.
- (46) Plummer, *2 Cor.*, 219; Barrett, *2 Cor.*, 208; Martin, *2 Cor.*, 226.
- (47) Thrall, *2 Cor.*, 489.
- (48) Windish, *2 Kor.*, 228; Thrall, *2 Cor.*, 489.
- (49) Plummer, *2 Cor.*, 219; Hughes, *2 Cor.*, 267.
- (50) Martin, *2 Cor.*, 227.
- (51) Barrett, *2 Cor.*, 208; Thrall, *2 Cor.*, 489.
- (52) Barrett, *2 Cor.*, 208.
- (53) Plummer, *2 Cor.*, 219.
- (54) Thrall, *2 Cor.*, 489.
- (55) Ps.Demetrius, 17; cf. A.J.Malherbe, *Ancient Epistolary Theorists*, Atlanta: Scholars Press, 1988.
- (56) Watson, "Paul's Painful Letter," 342-345.
- (57) Windish, *2 Kor.*, 75.
- (58) Ps.Demetrius, 8.
- (59) Ps.Libanius, 13, 60.
- (60) 山田耕太「第二コリント10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」
- (61) F.Young & D.F.Ford, *Meaning and Truth in 2 Corinthians*, London: SPCK/Grand Rapids: W.B.Eerdmans Pub.Co, 1987, 27-59.
- (62) B.Witherington III, *Conflict and Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians*, Grand Rapids: W.B.Eerdmans Pub.Co./Carlisle: The Paternoster Press, 1995.
- (63) 山田耕太「第二コリント10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」
- (64) E.A.Judge, "Paul's Boasting in Relation to Contemporary Professional Practice," *Australian Biblical Review* 16 (1968), 37-50; idem, "St Paul and Classical Society," *Jahrbuch für Antike und Christentum*, 15 (1972), 19-36; idem, "St Paul and Socrates," *Interpretation* 13 (1973), 106-116.
- (65) J.W.McCant, *2 Corinthians*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999; idem, "Second Corinthians as Parodic Apologia," Internet Conference Paper, *Rhetorics and Hermeneutics: A Conference Honoring Wilhelm Wuellner*, Claremont (<http://rhetjournal.uor.edu>), 2000, 1-28.
- (66) D.J.H.Amodor, "Revisiting 2 Corinthians: Rhetoric and the Case for Unity," *NTS* 46 (2000), 92-111; idem, "Re-reading 2 Corinthians: A Rhetorical Approach," Internet Conference

Paper, *The Rhetorical Argumentation on the Biblical Texts*, Lund (http://www.teol.lu.se/rhetorical), 2000, 1-22.

- (67) McCant, *2 Cor.*, 20-23; Amador, "Revisiting," 98-100.
- (68) Bultmann, *2 Kor.*, 11-12, 36, 183; idem, "καυχάομαι κτλ.," *TDNT*, vol.3 (1965), 645-654; idem. *Theologie des Neuen Testament*, (6.Aufl.) Tübingen: J.C.B. Mohr, 1968 (1.Aufl.1958), 242-243, 265, 269, 281, 546.
- (69) パウロの真筆は、第一テサロニケ書、ガラテヤ書、第一コリント書、フィリピ書、フィレモン書、第二コリント書、ローマ書の7通。パウロの真筆以外では、エフェソ2:9 (καυχᾶσθαι)、ヘブライ3:6 (καύχημα)、ヤコブ1:9 (καυχᾶσθαι)、4:16 (καυχᾶσθαι, καύχησις) で用いられている。
- (70) 山田耕太「第二コリント書1-9章の書簡理論的・修辞学的分析」、11-12頁。
- (71) 山田耕太「第二コリント書10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」、8-9頁。
- (72) Kennedy, *Second and Third Epistles*, 88-90; idem, "Problem," 343.
- (73) Plummer, *2 Cor.*, xxxii-xxxiii.
- (74) IIコリント5:12, 7:14, 9:2, 10:8, 13, 15, 16, 17(dis), 11:12, 16, 18(dis), 30(dis), 12:1, 5(dis), 6, 9.
- (75) IIコリント1:14, 5:12, 9:3.
- (76) IIコリント1:12, 7:4, 14, 8:24, 11:10, 17.
- (77) パウロの「誇り」全体像に関しては、以下を参照。Cf. C.H.Dodd, "The Mind of Paul: I (1933)," idem, *New Testament Studies*, Manchester: Manchester Univ.Press, 1953, 67-82; Bultmann, "καυχάομαι κτλ.,"; J.Zmijewski, "καυχάομαι κτλ.," *EDNT* vol.2 (1981), 276-279; C.K.Barrett, "Boasting (καυχᾶσθαι κτλ.) in the Pauline Epistles," A.Vanhoye (ed.), *L'Apôtre Paul: Personnalité, style et conception du ministère*, Leuven: Leuven Univ.Press, 1986, 363-368.

パウロの「誇り」とギリシア・ローマの社会的背景との関連については、以下を参照。Cf. Judge, "Paul's Boasting,"; H.D.Betz, *Der Apostel Paulus und die sokratische Tradition*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1972, 70-100; C.Forbes, "Comparison, Self-Praise and Irony: Paul's Boasting and the Conventions of Hellenistic Rhetoric," *NTS* 32 (1986), 1-30; P.Marshall, *Enmity in Corinth: Social Conventions in Paul's Relations with the Corinthians*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1987.

第二コリント書のパウロの「誇り」に関しては、以下を参照。E.Käsemann, "Die Legitimität des Apostels: Eine Untersuchung zu II Korinther 10-13," *ZNW* 41 (1942), 33-71, = K.H.Rengstorff (Hg.), *Das Paulusbild in der neueren deutschen Forschung*, Darmstadt:

- Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1969, 475-521; S.Haffmann, "‘Self-Commendation’ and Apostolic Legitimacy in 2 Corinthians: A Pauline Dialectic," *NTS* 36 (1990), 66-88; G.Strecker, "Die Legitimität des paulinischen Apostlates nach 2 Korinther 10-13," *NTS* 38 (1992), 566-586; G.Holland, "Speaking Like a Fool: Irony in 2 Corinthians 10-13," S.E.Porter & T.Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1993, 250-264; J.Lambrecht, "Dangerous Boasting: Paul’s Self-Commendation in 2 Corinthians 10-13," R.Bieringer (ed.), *The Corinthian Correspondence*, Leuvan: Leuvan Univ. Press, 1996, 325-346; D.F.Watson, "Paul’s Defense of His Honor through Boasting in 2 Corinthians 10-13, A Socio-Rhetorical Analysis," Internet Conference Paper: *The Rhetorical Argumentation on the Biblical Texts*, Lund (<http://www.teol.lu.se/rhetorical>), 2000, 1-19.
- (78) Haffmann, "But surprisingly, in spite of Käsemann’s ground-breaking work, the importance of the theme of ‘self-recommendation’ (συστάειν ἑαυτὸν) in 2 Corinthians has not often recognized, nor adequately emphasized and treated." ("Self-Recommendation," 69.) Cf. G.Dautzenberg, "Motive der Selbstdarstellung des Paulus in 2 Kor. 2,14-7,4," Vanhoye (ed.), *L’Apôtre Paul*, 150-162; L.Belleville, "A Letter of Apologetic Self-Commendation: 2 Cor.1:8-7:16," *NovT* 31 (1989), 142-163; idem, *Reflections of Glory: Paul’s Polemical Use of the Moses-Doxa Tradition in 2 Corinthians 3.1-18*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991, 104-135.
- (79) M.E.Thrall, "The Pauline Use of SYNEIDHSIS," *NTS* 14 (1967/68), 118-125.
- (80) Hughes, *2 Cor.*, 85.
- (81) Plummer, *2 Cor.*, 77.
- (82) Barrett, *2 Cor.*, 106.
- (83) Bultmann, *2 Kor.*, 148.
- (84) Thrall, *2 Cor.*, 217-218.
- (85) Windish, *2 Kor.*, 134; Barrett, *2 Cor.*, 129; Thrall, *2 Cor.*, 302.
- (86) Windish, *2 Kor.*, 177.
- (87) Bultmann, *Probleme*, 507; idem, *2 Kor.*, 149.
- (88) Thrall, *2 Cor.*, 403.
- (89) Barrett, *2 Cor.*, 185, 189; Furnish, *2 Cor.*, 354; Thrall, *2 Cor.*, 456. Bultmann (*2 Kor.*, 102-105, 171-172) は、4 : 2・6 : 4 で、パウロが積極的に自己推薦している箇所について、ほとんど何も言及していない。
- (90) Barrett, *2 Cor.*, 185.

- (91) Furnish, *2 Cor.*, 354.
- (92) 山田耕太「第二コリント書10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」8頁。
- (93) Forbes, "Comparison," 2-8; Marshall, *Enmity*, 325-339.
- (94) Kasemann, "Legitimität, "; Haffmann, "Self-Commendation, "; Lambrecht, "Dangerous Boasting."
- (95) Zmijevski, "καυχᾶσθαι," 279.
- (96) Lambrecht, "Dangerous Boasting."
- (97) Forbes, "Comparison," 10-13; Holland, "Speaking Like a Fool"; idem, "Paul's Use of Irony as a Rhetorical Technique," S.E.Porter & T.Olbricht (eds.), *The Rhetorical Analysis of Scripture: Essays from the 1995 London Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997, 234-248; Watson, "Paul's Defence."
- (98) Amador ("Re-reading," 6-7) は、第二コリント書の文体を "assertive modality" "volitional modality" "ironic modality" に分けるが、とりわけ10-13章でアイロニーの文体がなぜ使用されるのか、と言う点については言及していない。
- (99) Forbes, "Comparison," 8-13; Marshall, *Enmity*, 353-367; Watson, "Paul's Defence," 13-19.
- (100) Plutarch, *Malaria*, 539E-F.
- (101) Plutarch, *Malaria*, 540C.
- (102) Plutarch, *Malaria*, 541A.
- (103) Plutarch, *Malaria*, 541C.
- (104) Plutarch, *Malaria*, 541F.
- (105) Plutarch, *Malaria*, 544D-E.
- (106) Plutarch, *Malaria*, 544F.
- (107) Plutarch, *Malaria*, 545A.
- (108) Plutarch, *Malaria*, 545D.
- (109) *Rhet. ad Alex.*, 35, 1441b, 23.
- (110) Hermogenes, *Id.*, 2 VIII.

The Relation between 2 Cor.1–9 and 10–13 in Terms of Epistolary Theory and Rhetoric

Kota Yamada

1. Historical Retrospect of the Relation between 2 Cor. 1–9 and 10–13

The relation between 2 Cor.1–9 and 10–13 has been discussed and classified into the following three: (1) Semler–Windish theory : 2 Cor. 1–9 and 10–13 are different letters and written in this order, (2) Hausrath–Kennedy theory: 2 Cor. 1–9 and 10–13 are different letters and written in reverse order (Weiss–Bultmann theory and Schmithals–Bornkammtheory are developments of this type), (3) Zahn–Kümmel theory: 2 Cor.1–9 and 10–13 are the same one letter.

The point of discussion between the majority partition theories is whether the so-called “painful letter” (2:3,4) is identical with 2 Cor.10–13 [(2)], or not [(1)]; while that between the majority partition theories and the minority unity theory is whether the central theme of 2 Cor. is treated in the same way in 2 Cor.1–9 and 10–13 [(3)] or not [(1) and (2)].

2. The Relation between 2 Cor.1–9 and 10–13 in Terms of Epistolary Theory

“The painful letter” is analysed as “a letter of accusing” (*κατηγορικὸς*) by Ps.Demetrius from the situations before its composition (1:23–2:4) and after its reception (2:5–9, 7:5–8, 12–14), and particularly from the Corinthians’ response to it (7:9–11).

But 2 Cor.10–13 is already analysed as “a letter of apology” (*ἀπολογητικὸς*) elsewhere (K.Yamada, “Epistolary and Rhetorical Analyses of 2 Cor.10–13,” in *Pedilavium*, vol.50 [1999]). Thus, 2 Cor. 10–13 is not identical with “the painful letter” in terms of epistolary theory.

3. The Relation between 2 Cor. 1–9 and 10–13 in Terms of Rhetoric

The central theme of 2 Cor. is “boasting”, with its equivalent expression “recommend oneself/oneselves”, as is evident not only from its numerous usages in 2 Cor. and from the key words in the rhetorical “propositio” in 2 Cor. 1–9 (1:12–14) and 10–13 (10:12–18).

But Paul’s stance to deal with the central theme is different between in 2 Cor.1–9 and 10–13: positively treated in 2 Cor.1–9, but negatively and with strong irony in 2 Cor.10–13. Thus, 2 Cor.1–9 and 10–13 are not identical letters, written in different situations, in terms of rhetoric. This implies that Paul defended himself positively with “self-praise” (*περὶ αὐτολογίᾳ*) in 2 Cor.1–9, but he changed his strategy of his boasting negatively with strong irony in 2 Cor.10–13 as he faced severe criticism against him between 2 Cor.1–9 and 10–13.